

SF的読み解き  
子どもという風景

## 第二十一回 砂の幻想

堀内 守

身のおぼえ  
幼稚園や保育園には砂場がある。庭の片すみにあるのがふつうだ。  
もちろん、小学校の校庭にもあるが、こちらの方は走



り幅とび専用のような使われ方をしている。これとくらべると、園内の砂場はまことにジェネラルな使われ方をしている。

「ジェネラルな」などというよりも、端的に「あそび」と表現した方が当たっている。

あの砂がどんな感触のものかは、砂をつかんだこと、砂をすくったこと、砂を手から手へこぼすことなどを通じて記憶に残っていく。

たぶん、数えきれぬほどのくり返しを通して。

それは平凡な反復ではなく、感触が洗練されていく過程である。

夏の日光を浴びて、砂が熱気をもち、文字通り砂は砂のごとく、さらさらになっているときの砂の感触は、雨があがりの、水を含んだ砂とは大いに異なる。水の多い、少ないに応じ、砂の様態は変わる。トンネルを掘ってもくずれないほどの水分が含まれていることもある。水分が多すぎて、山盛りにすることも不可能な場合もある。

手ばかりではない。足も砂の感触を保持する。腕も、お尻も。

手という器管が何かをつくるための大事な器管であることをあらためて知ることができるのも、砂場の妙なるはたらきである。同時に、手が重要な感覚器管であることも、砂場を通して如実に示される。ことに、この後者の面は、身体と精神という重要なテーマの開幕にも通じている。

#### 砂の造型

砂場の面白さは、砂の形が自在なところから生じている。粘土とは違う。もちろん泥んこ遊びとも違う。形の保存が長くない。

砂場では何をつくるのかをあらかじめ考えておいて遊ぶというようなことは少ないようである。砂と戯れているうちにイメージが湧き、何かの形を思いつく。あるいはまわりの誰かのマネ、そして共同作業が始まったりする。

これも大事なことだが、夢中になって遊んでいる場面から日常に戻る。すると、まず立ちあがることになるが、夢中になっていた時の砂場と、立ちあがってあらためて眺めたときの砂場とは違ってみえてくる。さっきまで想像を刺激し、別世界に惹きこんでくれた砂の様子には、単なる砂場に戻ってしまう。また、身体論も日常に戻ってしまう。衣服が汚れてしまうからである。

砂場から出て、ふりかえってみれば、形のくずれた残骸があるばかり。せっかくなつくつたトンネルも城も、その他もろもろの意匠もデザインも、すっかり消え、夢の跡ばかりが見えている。

立ちどまって、もういちど眺めると、砂場の残骸は、また違った形に見えてくる。

子どもらが去った後の、園内の砂場は、まことにさびさびとしている。昼間の嬌声も歓声も消え、掘り起こされた跡、盛りあげられた跡、溝を掘った跡、その他の「跡」が言うに言われぬ意味を発信しはじめ。

毎日のこと、と見なすと、意味は消えてしまう。しか

し、時には砂場の傍で、あるいは少し距離をとって、彼らの遊びの「跡」を眺めてみる――。

何かの素型として見えてくる。

### 「跡」の分類

その「跡」は、私たちの依って立つ観点によって、いくつかのグループに分類可能である。

平面的、立体的、空間的なデザインの「跡」のように見えてくることもある。少し言い方を変えて、これを二次元的、三次元的、四次的と置き換えてみれば、「跡」の意味はもっとよくわかるのではなからうか。

あるいは、もっとモダンな表現を使って、この「跡」をもって、建築、都市計画、環境デザイン、景観のディスプレイなどにひきつけて見ることもできよう。

この「跡」は、時間を逆のぼって、子どもたちがこの砂場で、何かを造型するために、その身体的機能を拡張し、なかまたちといっしょに情報を交換しながら、一つの秩序をつくり出し出していたプロセスをも物語ってくれる

だろう。

「跡」は、なお、左のようなことも物語りはじめる。

砂場の溝、山、穴などは、一つの表象として私たちに訴えはじめる。如才なき筋、共感のある山、失敗の川、

無念の跡などのごとく。

しかも即時にわかるのだ。見てすぐにわかる。

この点は砂場の予想以上の重要などころである。砂で何かを形づくる。それがすぐに自分のもっているイメージにはねかえってくるからである。ひとつのパターンを繰り返しながら、それを洗練していく過程は、このことをきっかけにしている。

さて、「跡」をできるかぎり丹念に追ってみて、その意味を整理してみよう。「跡」が〈何かのように〉見えなくなるのを読みとると、以下のように多様になる。

### 簡素化

あいまいな形を単純ながらも明確にしてみようとする

こと。「川」らしき跡と、「山」らしき跡をもとに、「町」

をつくらうとしていたのだと判断したりすること。これはバラバラなものを一つに結びつけ、〈ままとまり〉としてとらえようとする傾向のあることを示している。

この〈ままとまり〉は、容易にできないこともある。〈ままとまり〉を形づくるのを妨げるような、異形なものが存在し、うまく〈ままとまり〉を形成しない。ところが、そのことがかえって面白く見えることもある。山の形とおぼしき頂あたりに、穴が掘ってある。「火山のつもりか？」と思わせたりする。片づけておく約束のはずだったシャベルがその頂点にのっかっていたりすることもある。

それが忘却のしるしではなく、「この山をくすすな」という子どもたちの意志表示だったりする。「仕事中心!」というわけだ。

こんなことは、あとで子どもたちに確かめてみてわかることである。砂場の「跡」も、こうやってことばによって補なうことで一段と世界を広げてくる。

## 砂山の広がり

砂という具体物から表象の世界に入ると、「砂」は実に多様な熟語を呼び寄せる。「いさご」という古典的な表現、「砂丘」「砂州」「砂利」「砂金」「砂時計」「砂煙」「砂鉄」「砂塵」「土砂」「白妙」等々。

北原白秋の手になる「砂山」は、中山晋平の作曲したものと、山田耕筰が作曲したものの二つがある。新潟の海浜が舞台らしい。「荒海」を向うにした砂浜だから本当はさびさびした風景だろう。しかし、作曲者の力によって奥行きがじっくり出されてくる。

石川啄木の「東海の小島の磯の白砂に……」の歌は、まるで映画のシーンが遠景からクローズアップに変わっていきような歌である。

「白砂」は、「砂」の特性を示すだけではあるまい。それは、それを「白」とさせている光をも表現していると考えることができるからだ。つまり、晴れている日のことなのである。雨の日の歌であるなら「蟹と戯る」とはいえまい。

この歌は、いまでは小学校の教科書のなかに載るようになった。そこで少々おかしな事態が生じた。「蟹と戯る」はわかるのである。しかし、小学生には、「我泣きぬれて」がわからないのである。「戯れて」いるのなら、喜々としてびまわっているというのが彼らの常識であるらしい。こちらの方が第一印象として強く作用するものだから、「泣きぬれて」はつながらなくなってしまふ。つまりは〈涙〉というシンボルがロマン的な文脈を呼び起こさなくなったわけである。

## 〈に〉のこと

「白砂に」の「に」も問題である。

よく考えてみると、これも一筋縄ではいかない。歌の意味をたどってみると、「磯の白砂の上で」とか、「白砂で」とか、だんだん「に」とは違った横道に引っぱりこまれていきような気がする。「に」はホントにふんわかしている。

〈涙〉がわからなければ、この歌の翳かげりもわからないだ

ろう。〈孤独〉もわかるまい。

疑えば「白砂」もシラを切っている。シロスナではなく、「シラスナ」。白梅、白菊、白雲、白子、白州、白滝、白土、白露、白波、白鳥、白羽。いずれもシラである。

「白砂」＝白い砂。それは白い色ばかりを示してはいない。この歌のなかでは、ここだけが色を示しているが、その白はまた、空しさやけがれのなさの象徴でもある。

「東海の小島の磯の○砂に……」の○のところに、別の色彩名を代入してみるとよい。「黒砂に」「赤砂に」などと。

小学生の時にはこんなことは余分な理屈である。意味だの、味わいだのを知らずとも、この歌を唱えてみて、どことなく、さらさらと流れていくような歌であることを味わえばよいのである。

海の浜で遊んだことがなくとも、幼稚園内の砂場で遊んだ経験があれば、何となくわかる歌なのだ。

現実にはことばどおりのまっ白な砂なんてめったにな

い。白っぽく見えるだけである。乾いた砂はそのように見える。が、まっ白ではないだろう。白堊のような白ではない。「白砂」とは、ゲンジツの砂というよりも、ことばが喚起するイメージなのである。ゲンジツとびたりと対応するのではなく、少々黒っぽかるうが、黄色っぽかるうが、印象を一発で「白」と断じ、イメージにおいては限りなく白堊に近づけていく。

詩的言語にはそういうはたらきがある。

#### 詩的なことば

このことがわかると、砂場で子どもたちが戯れているとき発することばの妙味を理解することができるだろう。ゲンジツに目前にあるのは砂の盛りあがったものである。

「これは富士山。これは海」といったことばは、砂の造型を契機に発せられることばである。ホントに富士山だと思っっているのである。この浸入は想像力のなせるところである。模型、模像をつくり出し、シミュレートして

いる。それが「つもり」というものである。漢字では「心算」と書く。

詩的な言語は、日常用語の中から組み合わせを変えていけばよい。それは一つ一つあげれば、日常言語と変わりはない。しかし、問題は、一連のことは詩的な文脈を紡ぎ出すか否かにかかっている。

子どものつぶやき、ひとりごとは、自己内対話のあらわれたものである。自問自答に近い。その過程は、手で材料と闘いながら、頭の中のイメージを形に表現していくのに相応している。また、なかまとともにコミュニケーションしながら何かを形づくっていくのに相応している。手の動きが繰り返しや反復の場合であるなら、つぶやきも繰り返しに近くなる。単調なリズムがそれに伴って生じてくる。

### 砂の行くえ

いまでもふしぎに思っていることがある。

保育園や幼稚園の砂場の砂は、少しずつなくなってい

くが、その多くは、子どもたちが靴の中に入れて砂場から持ち出すからであるようだ。

遊んでいるうちに、知らず知らずのあいだに靴の中に砂が入りこむ。ひとりひとは、そうやってわずかの砂をもち帰る。しかし、総勢ではかなりの量になる。少しずつ砂は減っていく。当然補給しなければならぬだろう。あれは、ふつうどれくらいの間おきになされるのだろうか。

ひとりひとりの子どもが靴の中に入れてまま持ち帰った砂は、玄関あたりで払われる。時には用心して、外で払われ、そのあとで玄関に入るのを許される。これがまたふしぎなのである。毎日の掃除のときに、その砂は掃きとられるのかもしれない。

靴下や、ポケットにいつのまにか砂が入っていることもある。だから、砂は洗濯場で流されることもあるわけだ。

そのときの砂は、もはや砂場にあったときの砂とは異なったものになっている。当然外で払ってくるもの。それ

が家の中に入りこんできたのである。

「いやーね、こんなに砂をもちこんできたりして」

でも、砂だから、ばらばらと払えば除去できる。べったりとくっついている泥とは違う。

この違いは子どもにもわかっている。砂はよこれとは違っている。よこれではないのである。それが証拠にてのひらに載せても、手は汚れはしない。泥んこ遊びのときのように、爪の中にまで入ってきはしない。さらさらと滑っていくだけである。

この、くすぐったいような、こそばゆいような感触は、泥んこのべたべたした感じとは異なっている。ダンゴにはできない。ねばり気がないからだ。しかし、少々水を含んだ砂を盛りあげ、足で固めると、砂山はくずれなくなる。水分が粒と粒とを結晶のように安定させてしまう。ある限界をちよつとでも超えれば、また形はくずれはじめ。

## 砂状の土

私たちが「砂」と呼びならわしているものも、実はいろいろある。

「砂土」というのは八〇パーセント以上の砂のまじった土壌のことだそうだ。これよりも微砂で、粘土の多い土が「砂壤土」だ。砂が三〇から六〇パーセントで、これと粘土または有機物と混合されているのが「壤土」。

してみると、いわゆる「砂上の楼閣」なるたとえに出てくる「砂」は、これらとは別でなければ話が合わない。砂なる。純粹な「砂」でないと、諺どおりにならない。砂の上に建てた楼閣の基礎がやわらかくて顛覆てんぷくするおそれがあるというのだから。

でも、この諺は時間的に見れば、少なからず興味をひく。砂上の楼閣がいくらくずれやすいといっても、楼閣として一応は砂上に建てられなければならない。土台だけつくったらこわれたというのでは「楼閣」とはいえない。とにかく、いったんは完成した。そして短かい時間存続し、突然何らかの理由でくずれ落ちた——というの



でなければおかしいだろう。

子どもの感じ方に即してこの諺を解釈すれば、砂上の楼閣は何らかの警告を表現しているというよりも、砂上にどんな形で建っているのかいちどぜひ見てみたいと思わせ、ついで、できることなら、その楼閣がくずれ落ちる瞬間を見てみたいと思わせることだろう。

これは息をつめながら積木を積みあげるのに似ている。そして、はらはらしながら完成させ、完成したあとでくずしてしまうのに似ていよう。そこには、子どもらしい美学がある。

ことによると、あのバベルの塔なども、そういうきわどさを含んでいたのではなかったらうか。

「砂上の楼閣」とは、よく使われた割にはイメージのあいまいな表現であった。どんな楼閣なのか、形状や色がわからなくとも、せめてヒントぐらいはほしい。

何階もある高い建物、高樓である。例の「荒城の月」でも「春高樓の花の宴」とうたっている。もっとも、これは作詩者の土井晩翠の心に映った心象風景だし、また

墨絵でぼかされたような風景のはずだから、砂上の楼閣よりも鮮明である。

### 砂の広がり

「砂絵」というのは、手にした砂を少しずつ地上にこぼして描いた絵。江戸時代にはじまった芸である。指先などで砂上に書いて習手の手本にして教えたのが「砂手本」。

「砂雲隠」は茶の湯につきもの。露地口の内部に自然石を置き、川砂を盛って、杖をそえてある。本来は貴人の用便のためのものであったが、今日では裝飾的存在になつてしまった。「砂風呂」は今日でも体験できる。「砂払い」とは、こんにゃくを食べると体内の砂を払うといわれている。本当に体内には砂が入っている。鶏の「砂囊」を思い出させてくれる。

体内、とはいえないが、体内を思わせなのが汽車の機関車の上部にとりつけられていた「砂箱」などである。汽車が青息吐息で急勾配にさしかかる。すると、動輪と

レールとの間の粘着力を増すために、レール上に砂をまいた。その砂を貯えておく「砂箱」は、機関車のシリンドラーの上部に、らくだのごぶのような形でとりつけられてあった。

動物の名に付されているのが「砂蟹」。「砂団子」をつくることでも有名である。そのほかに忘れてならないのが「スナメリ（砂滑）」で、これはクジラ目の海獣で、体長一・五メートルくらいの小さなイルカである。少々こっけいな名をもっているのが「砂潜（すなもぐり）」で、これはスズキ目の魚。体長は三十センチぐらいになる。「砂八目」は、川や湖に産するウナギの一種である。植物の代表が「砂引草」。ムラサキ科の多年草で、各地の海浜に自生している。ハマムラサキとも呼ばれている。

すまうの土俵ぎわの見物席を「砂被（すなかぶり）」という。「砂がつく」「砂をかます」はすまう用語である。

あさりの味噌汁はおいしいが、時折砂が入っているこ

ともある。砂をかむ思いとはここからきたのかもしれないと思われるくらい情ない瞬間である。

夜の空の「金の砂子」とは童謡のなかに出てくる一節で、子どもにも納得できる隠喩であった。

（名古屋大学）